様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ０２４１４

研究課題名（和文）〈プラハのドイツ語文学〉受容の社会文化史的研究

研究課題名（英文）Socio-cultural Study of the Reception of German-Speaking Literature in Prague

研究代表者
三谷　研爾（Mitani, Kenji）

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：８０２０００４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、〈プラハのドイツ語文学〉がどのように受容され、また再生産されたかをマグリス、モニーコヴァー、デーメツという３人のそれぞれ異なった社会的・言語的背景をもつ知識人の著作活動に即して分析したものである。彼にとっては、自身の文化的・社会的アイデンティティの不安定性ないし複数性への自覚をとおして、プラハの多言語・多文化環境を再確認し、またその過程を検証して言語化することが、その執筆の核となったことを明らかにした。また、こうした文学的再生産のプロセスを地域文学史記述のなかで位置づける可能性を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は、ともすればドイツ文学分野におけるかなり特殊なテーマとみなされがちな〈プラハのドイツ語文学〉研究について、それがドイツ語世界に限定されることなく受容され、さらには新たなテクスト生産につながっているという現象に注目し、メカニズムを考察する。検証の結果、多文化・多言語環境における複数的なアイデンティティのあり方が強化される機制を中核にして、活発な文化的創造が生じることが確認された。

研究成果の概要（英文）：This research project aims to investigate the process of reception of the German-speaking literature in Prague through case studies of the writings by Claudio Magris, Libusa Monikova and Peter Demetz. These intellectuals with different social and linguistic backgrounds are conscious of their instability or plurality of their own socio-cultural identity. It is writing activities which confirm the process of their identity bilding and maintain it as literary works. This reproduction mechanism of text can be esteemed also in the local historiography of literature in Bohemia.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：境界文学　プラハ　ボヘミア　多言語環境　地域文学史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

1960 年代の問題提起を受け、とりわけ 1980 年代以降活発に取り組まれてきた〈プラハのドイツ語文学〉の研究は、忘れられていた個別作家の作品発掘と評価から、当時のプラハ・ドイツ社会の社会的・文化的環境の検証をへて、ドイツ・オーストリア文学史における再評価へと議論が進んできた。しかしながら、研究史をあらためて振り返って見るならば、このテーマについて語ることじたい、当の研究主体自身が置かれている状況ないし社会的・文化的コンテクストと密接に関連していると推測される。それは、〈プラハのドイツ語文学〉とその研究を受容史の観点から把握し直すことになる。2000 年代を迎えて研究状況が大きく変化するなかで、〈プラハのドイツ語文学〉を語ることじたい、社会文化史的コンテクストに規定されつつ取り組まれてきたとみて、そのプロセスに光を当てる研究課題を構想することになった。

２．研究の目的

上記の問題意識にもとづき、本研究課題は世紀転換期のプラハにみられたドイツ（語）とチェコ（語）の複数文化的環境の経験と記憶、さらにはその土壌から生まれ育ったドイツ語文学が、第二次世界大戦後、どのように受容されてきたかを検証する。そこでは、受容者が政治的・社会的・文化的な境界状況に身を置いたとき、プラハの過去を想起すると同時にまた対決することによって、自身もまたプラハについて積極的に語る表現主体になっていくという事例が多くみられる。本研究課題は、これをひとつの文学再生産・再創造のメカニズムととらえ、1960 年代から 2000 年代にかけて、それぞれ異なった社会的・文化的コンテクストのもとでプラハを語った知識人に即して検証する。それによって、複数文化的環境の経験と記憶に根ざした文学が、受容の過程においても常に高度な文学的・文化的生産性を保持してきた機制とその意味を明らかにする。

３．研究の方法

これまで〈プラハのドイツ語文学〉は、1880 年代に始まりナチスドイツの侵攻によってチャコスロヴァキア第一共和国が解体した 1939 年まで、もしくは第二次世界大戦終結の 1945 年まで、という枠組のなかで論じられてきた。これにたいして本研究課題は、1960 年代以降にあらわれた、文学史的現象としての〈プラハのドイツ語文学〉の当事者ではない知識人たちによる言説を取り上げる。具体的には、ゴルトシュテュカーEduard Goldstücker、マグリス Claudio Magris、モニーコヴァーLibse Monikova、デーメツ Peter Demetz の４名に注目して、その〈プラハのドイツ語文学〉についての発言をフォローし、彼ら自身どのような状況のなかでプラハと関わりあっていたかを検証する。プラハのドイツ語文学〉研究は 2000 年代以降、いっそう細分化が進むとともにローカル文学史研究の色彩を濃くしている。そのような現状において、かつてのような文学再生産のメカニズムは依然として機能しうるのかどうかを、あわせて考察する。

３．研究成果

(1) ゴルトシュテュカー(1913-2000)の事例

1960 年代に初めて〈プラハのドイツ語文学〉研究の意義と必要性を説いたゴルトシュテュカーにとっては、〈プラハのドイツ語文学〉を語ることは、1930 年代の表現主義論争以来焦点となってきたモダニズム芸術の再評価を意味していた。彼は東側におけるカフカ評価の転換を唱導して教条的な社会主義リアリズム美学と対決するにあたり、表現主義芸術の中欧的モダニズムとしての側面を高く評価している。このようなゴルトシュテュカーの議論は、やがて「プラハの春」改革運動に身を投じることになるユダヤ系知識人としての彼の政治的・社会的な立場と表裏一体の関係にあったものと言える。

(2) マグリス(1939-)の事例

『オーストリア文学とハプスブルク神話』の著者マグリスは、出身地である多言語都市トリエステの経験を背景にして、1970 年代に〈プラハのドイツ語文学〉を含むプラハ研究を展開した。彼はプラハ文学とトリエステ文学の共通性として「境界文学」という概念を提唱する。これは政治的・社会的・文化的な境界地帯では、個人のアイデンティティもまた複数化され、常に流動的である。そこでは、アイデンティティの複数性・流動性自体がアイデンティティの実質となるという事態が生じ、そうした矛盾は政治的・社会的緊張が高まることによって深まる一方、同時に言語化されて文学テクストとして結晶するとマグリスと理解している。

マグリスはこの理解モデルにもとづいてプラハ文学を考察し、そのメカニズムがドイツ語文学のみならずチェコ文学にも働いていると指摘した。すなわち、ハプスブルク帝国崩壊に前後してカフカやヴェルフェルなどのドイツ語作家が輩出したのと同じ意味で、ナチスドイツの侵攻やワルシャワ条約機構軍の軍事介入が招いた社会的・文化的危機を背景に、フラバルのようなチェコ語作家が生み出された、と説明されている。この同じメカニズムの働きをトリエステのイタリア語文学、さらにはクロアチア語文学にも認めたマグリスは、やがて自ら小説を執筆するようになり、その意味で自身の文学活動の起点を語っていると解釈される。

(3) モニーコヴァー(1945- 98)の事例

チェコ出身のモニーコヴァーは、ゴルトシュテュカーのもとでドイツ文学研究者として出発したが、チェコ事件ののち西ドイツに移って作家に転身した。彼女が著作活動に転じた契機がこの「越境」ないし「亡命」にあるのは間違いないが、さらに大きな要因はカフカ文学への親近と対決である。とりわけ『城』後半の大部分を占めるバルナバス一家のエピソードを、女性視点による閉鎖的な共同社会からの脱出譚として再話することで、モニーコヴァーは独自の文学世界を開拓することに成功した。チェコ語を母語としていた彼女にとって「越境」「亡命」は、〈プラハのドイツ語文学〉との対決・継受という回路をへて、ドイツ語作家としての活動に結実したと見ることができる。

(4) デーメツ(1922-)の事例

デーメツもまたチェコ出身のユダヤ系知識人で、第二次世界大戦後にアメリカに亡命してのち、長年にわたってイエール大学の教壇に立った。彼がプラハについて多く発言・執筆をするのは、イエールを退いたのち、体制転換後のプラハを実に 40 年ぶりに再訪して以後である。デーメツのプラハ論で注目すべきは、ひとつはもともと南イタリアに発するファミリーヒストリー、もうひとつは美化ないし神話化されて語られることの多い都市プラハの景観を歴史的・社会的なコンテクストに戻して位置づけようとするスタイルである。前者から窺われるのは、プラハ社会が私的領域にあってはドイツ／チェコ／ユダヤの３要素が個人・家族のあいだで複雑に絡み合っていて、公的領域にみられる分断化や柱状化とは様相を異にしている点である。そうした事情も含め、プラハの社会史的状況から文化現象を評価し、文学テクストを解読するデーメツのプラハ論は、マグリスがとらえた文学的再生産メカニズムがプラハの神話化と結びつき易いのにたいし、逆に脱神話化を目指すテクスト再生産を体現していると言える。

以上の４つの事例は、1960 年代から 2000 年代へと連なるものであり、それぞれの社会・文化史的環境のもとで彼ら知識人たち複数文化都市プラハの環境とその文学の記憶・遺産と向かい合い、自身の置かれた状況をそこに積極的に投入することによって、新たなテクスト生産に赴いたものと評価することができる。それは、研究状況が粗から密へと進展していったという単線的な歴史をあらわすものではなく、むしろ研究主体がそのつど立っている地点からの積極的な読み込みの所産だと見るべきものだろう。その意味で、2000 年代以降の研究動向のなかで、とりわけヴァインベルクとクラップマンが提唱しているボヘミア地域文学史構想は、現在の文化状況を逆照射するものである。プラハとボヘミア辺縁地域（いわゆるズデーテン地方）との二項対立図式を棄却し、ボヘミア一円での社会的・文化的ネットワークを再構成するその構想は、ナショナリズムの視角ではなくローカリズムの視角から文学現象を総体的に把握する試みであり、つまりは国民統合ではなく地域統合の物語が要請されていることの証左と考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 三谷研爾	４．巻 34
２．論文標題 ある越境的知識人の肖像　プラハ出身の文学者ペーター・デーメツ	５．発行年 2018年
３．雑誌名 独文学報	６．最初と最後の頁 63-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 島田淳子	４．巻 34
２．論文標題 チェコにおける〈プラハのドイツ語文学〉研究機関の現状　クルト・クロロプ研究所とプラハ文学館を中心に	５．発行年 2018年
３．雑誌名 独文学報	６．最初と最後の頁 77-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 三谷研爾	４．巻 32
２．論文標題 継受される境界文学　マグリス『撞着語法としてのプラハ』再読	５．発行年 2016年
３．雑誌名 独文学報	６．最初と最後の頁 83-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 三谷研爾
２．発表標題 ボヘミアにおけるドイツ語文学史記述
３．学会等名 シンポジウム「東欧文学の多言語的トポス」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 三谷研爾
２．発表標題 「シレジア」の文学史記述：ドイツ語圏の視点から
３．学会等名 「シレジア」文学史の横断的研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 三谷研爾
２．発表標題 〈プラハのドイツ語文学〉再考
３．学会等名 日本独文学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 三谷研爾
２．発表標題 日本における〈プラハのドイツ語文学〉
３．学会等名 ボヘミア・フォーラム
４．発表年 2016年

１．発表者名 島田淳子
２．発表標題 羊皮紙としての歴史　L.モニーコヴァー『ファサード』における後期社会主義
３．学会等名 「プラハの春」研究会
４．発表年 2016年

１．発表者名 島田淳子
２．発表標題 ライネロヴァーとモニーコヴァーにみる〈プラハのドイツ語文学〉継受
３．学会等名 日本独文学会
４．発表年 2016年

１．発表者名 島田淳子
２．発表標題 カフカからモニーコヴァーへ　プラハ発ふたつのマイナー文学
３．学会等名 日本独文学会
４．発表年 2015年

１．発表者名 島田淳子
２．発表標題 翻案から創作へ　モニーコヴァー『亡き王女のためのパヴァーヌ』におけるカフカ『城』の書換えを手がかりに
３．学会等名 日本スラブ学研究会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計2件

１．著者名 三谷研爾、阿部賢一、川島隆、島田淳子、中村寿	４．発行年 2017年
２．出版社 日本独文学会	５．総ページ数 60
３．書名 〈プラハのドイツ語文学〉再考	

１．著者名 三谷研爾、阿部賢一、藤田恭子、越野剛、井上暁子	４．発行年 2020年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 256
３．書名 東欧文学の多言語的トポス	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	島田　淳子 (Shimada Junko)		